

えにし

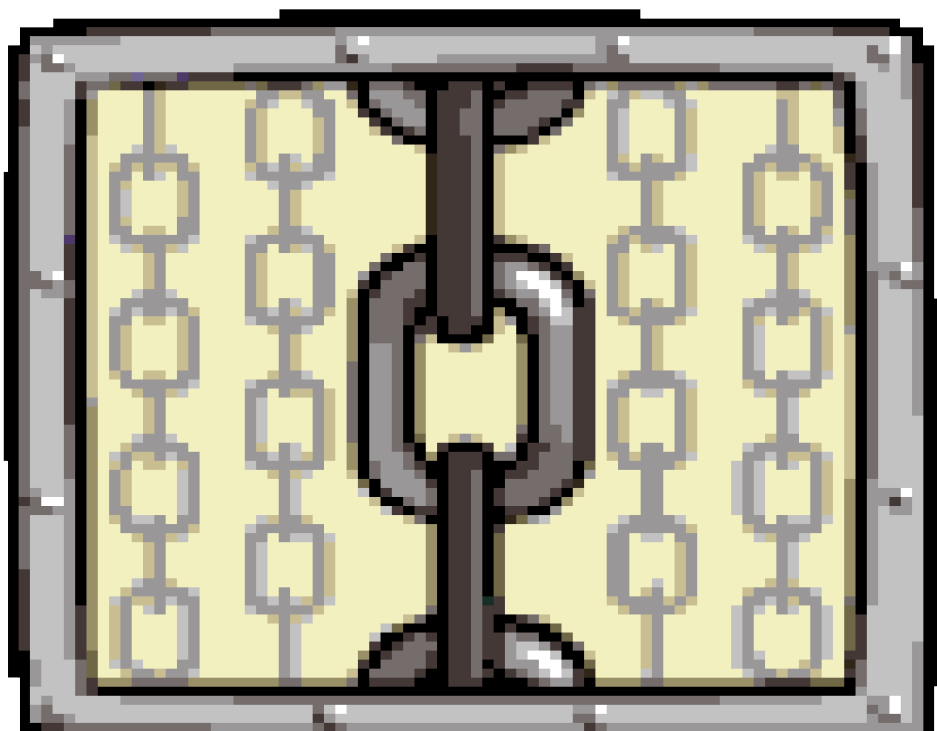
縁

の

わ

環

高 木 徳 一



目次

[illegible]

一。ピンク気味の葬式

思いの外、菊の盛り花で飾られていた。

中央の遺影はカジュアルスタイルでサイコロの顔に頬の膨らみを見せ、垂れ目に心なしか笑みを浮かべている。

柿本秀光は線香を上げ、合掌し、話し掛けた。

（一ヶ月前の叔母さんの一周忌には車椅子ながら元気な姿で、互いに会話し、飲んでいたのに・・・

亡くなったと聞いて信じられなかったよ）（秀坊

薄々お迎えが来るなど分かっていたぜ）（そう言え

ば、一年前の叔母さんの通夜の席で、女坊さんは

小学校時代の級友で、自分の時にはしっかりと押

で仏にしてくれと頻りに頼んでいたね）（あの時

から次はおいらだと・・・）（そうなの、予感があるん

だ。波乱に富んだ甥だと母から聞かされていたけ

ど、内の父より五歳も長生きしたし、父の様に七

年の長患いもなく、ある意味で、大往生と言える

かも・・・）（まあな。周りには迷惑掛けたが好き勝

手に生きてきて、悔いは無いわ）（安らかに、仏の

世界に旅立ち、親族を見守って下さいな）（ま、大

口は叩けねえが、仏になれたら、そうするべえ）

金刺繍の花模様の布で覆われたお棺の中の人物は、

笹沼龍蔵六十六歳で、五人兄弟妹の二番目である。

鳶職の頭だった蔵之助とはつの間に生まれた。蔵

之助には弟の信次郎、喜三と一番下の妹ふみがい

る。ふみが税務職員だった柿本宗忠に嫁ぎ、春子、

夏子、秀光を産んだ。従って、龍蔵は秀光の六歳

上の従兄になる。

眉の太い中肉中背の秀光は肩にハスキーボイスが

乗ったので、振り返った。「小父さん、お忙しい所

有難う御座います。お越し頂いて父も喜んでいま

す」黒の洋服に喪主の菊のリボンを付けた龍蔵の

長女が丁寧なお辞儀をする。「やあ、みどりちゃん。

本家から連絡を受けた時には驚いたわ。今お父さ

んと話してたんだが、つい一ヶ月前の貴女のお祖

母さんの一周忌では元気だったのに・・」「ええ。前日までお酒を飲んでいて、機嫌だったのです。が・・。翌朝、食事時に吐いて、救急車の中で心臓が止まってしまつて・・。」「そうだったの。龍ちゃんはしつかり面倒みて貰つていたから、みどりちゃんに感謝しているよ」「二十歳の頃には父とよく言い争つていました・・。」「昔氣質で口に出しては感謝の言葉が言えなかつたんじゃないの」「五年前に脚を傷めて車椅子になつてからは、人前でもみどりが世話してくれて嬉しいと涙脆くなりました」「そうか。歳を重ね、また身が不自由になつて心がそのまま口から出るようになったんだね」「もう少し長生きして、私の花嫁姿を見て貰いたかつたんですけど・・。でも、ご飯より好きだつたお酒を毎日飲めて幸せだったと思います。医者嫌いで健康診断も受けていなかったから仕方無いです」「しつかりとお父さんを見送つてやうつね。姉弟妹仲良く頑張つて欲しい」「小父さん、これか

らもよろしくお願い致します」

やや太り氣味のみどりはその場を離れ、他の親戚に挨拶に向つた。

目の周りが赤くなつてゐる弟の栄治は二人の息子の一人を骨太の腕に抱いていて、そこに秀光が近付き、お悔やみを述べた。お忙しい中、お出で頂き有難う御座いますとの言葉が途切れ途切れに返つて来た。

腕時計の針が垂直になつた午後六時、細身の司会者が通夜開始を宣し、導師入場となる。参列者は合掌し迎えた。紫の袈裟の女僧侶の後に、長髪で黄衣の一人娘が従い、お棺の前の椅子に腰を落とした。

お経を唱え、時々鳴る木魚と鐘の音が死者の心の臓に響いている。

正面向つて左の先頭には親戚代表の菊のリボンを付けた龍蔵の弟で三男の哲也がふくら丸顔の狸目を閉じていた。その後ろで、秀光は知つてゐる

顔は三割位で、人は鼠算式に増えていくものだと
しみじみ思つた。赤子をあやしている女も二人居
る。出生率は一・二を切つたとか切らないとか言
つて少子化が問題になっているが。

南無妙法蓮華經の繰り返しの段では、同じ宗派の
秀光も低音で唱え、龍ちゃんが一刻も早く仏に列
せられる様に熱を入れた。

順に遺族、親族が左右の席から立ち上がり、二列
に並んで合掌し、焼香をする。秀光が戻つて、目
を上げると、黒いツーピースの婦人が顔を上げた
所だつた。秀光は生唾を飲み込んだ。彼女は暫し
遺影を見詰めている。柔和な目の中に意思を持つ
た瞳、やや顎の方が狭い色白の小顔、肩まで垂れ
る細い黒髪。

（龍ちゃん、見上げている一際目立つ別嬪とは、
どう言う関係なんだね・）（そうか、そうだよな、
秀坊は知ら無かつたな。彼女はみどりの母親の黒
沢あけみだ）（何時だつたか、母が実家から帰つて

来て、龍に大原麗子似の美人の娘を紹介された時
には、びつくらこいたと。何処が気に入られたの
かと・。蓼食う虫も好き好きだわなとも言つて
た。若い娘をたぶらかしたのだらうとも）（本当だ
から、返す言葉も無いぜ。叔母さんは見る眼が鋭
いからな）（一目見て大袈裟でなく、目を見張つた
よ、学生時代の彼女に余りに似ているので・。
他人の空似とは良く言つたものだ。そっくりさん
が日本で三人は居ると言われていて、実際に大学
の図書館司書の小母さんに後姿と横顔が瓜二つの
先輩を教えられたよ。相手の顎の近辺がやや広い
感じだが、目鼻立ちから背もクローン羊のドーリ
ーではないが、見間違ふ程だつた）（そう言う事も
あるんだわな）

二人でテレパシーを送り合っている間にも、焼香
の列は進む。お河童頭の幼い女の子も母親の真似
をして、刻み香をもみじの手に握り、木炭にくべ、
にこやかな笑みを浮かべる。

（おいらから見て、左側の女は三番目の妻の草刈桃代で英樹、桃子を産んでくれた）（三人も奥さんが居たなんて初耳だ。大分持てたんだね、龍ちゃんは・・・。僕なんざ、未だに独身だよ）

顔と優しさでは龍蔵に引けを取らないと思つてゐる秀光は、龍蔵の何処が女を誘引するの不思議であつた。

（ほら、ほら、秀坊。前田美波里を一回り小さくした女が合掌してゐるだろう。彼女が栄治の生みの親だね）（それにしても、別れた妻が三人とも葬式に出て来るとは、龍ちゃんには人徳が有つたのかな・・・）（そんな事はねえだな、秀坊。おいらの顔を見れば分かるべえな。みどりに三人を紹介して貰い、酒を注いでやれば、俺の化けの皮を剥がしに掛かるだろうから）（そんな事してもいいのか、龍ちゃん）（ああ、いいとも。死んだ身には何ら堪えねえべ）

一般の参加者は焼香を済ませ、洋風待合室の椅子

に座り、清めの酒を飲み、料理に箸を出す。一時間のお経と焼香が終わり、導師が退出した後、遺族、親族が隣室に入る。

皆がテーブル席に着くと、三十路になつた喪主のあけみが掠れ声に涙を乗せ、「皆さん、ご多忙の折父の通夜にご臨席賜り、心より御礼申し上げます。前の晩まで大好きなお酒をたしなんでおり、翌日に気分が悪くなつて、救急車を頼みましたが、残念ながら車の中で息を引き取りました。何も準備は出来ませんでしたがお召し上がりながら思ひ出話などして頂ければ、父も喜ぶ事でしょう。本日は本当に有難う御座いました」と、気丈にもきちんと挨拶をし、一列目の坊さんの横に座つた。秀光は四列目の中程に母の二番目の兄信次郎と三番目の兄喜二の息子達と並んで座を占めた。

「色々な商売に手を出した父は何処に行くにも母を連れ回り、長男の僕は家に置いてきぼりで、従兄弟の顔も殆ど知らないんだ。一つ上の龍蔵さん

にも昨年のはつ伯母さんのお葬式で会ったのが最初なんだよ」全面白髪を七三に分けた信次郎の長男雅之が口をやや尖らせながら話す。

「僕も同じだよ」と喜三のぼつちの長男の貢がはち切れそうな式服を纏い、満月顔で言う。貢は足の苦患な母親の代理である。

秀光はビールを飲み干しながら、思い出を喋る。

「小学生の夏休みに母の実家に遊びに行った時、ガキ大将の龍ちゃんに連れられて五、六人で近所の高崎川に四つ手を仕掛けフナやドジョウを掬い上げたり、スルメを棒の先に吊るしてエビガニを穴から引つ張り上げたり、田圃のイナゴを捕ったりして、家に持ち帰り、叔母さんに料理して貰い、美味しく食べたもんだ。時には高崎川を上って西印旛沼にも遠征したな。龍ちゃんは中学を卒業してから家に余り寄り付かなくなつて、それ以来遊んで貰った記憶は無い。一度、庭先でちらつと後姿を見掛けた事が有る切りだな」

左手の一人置いた先に、龍蔵に先程紹介された美形のあけみさんが居たので、秀光は確認の為声を掛けようとした。その時、刈り上げスタイルの哲也が酒を注ぎに來た。

「よう、秀ちゃん。清め酒を飲んでくれ。兄貴は皆に來て貰つて喜んでゐるわ」と哲也は言いつつ、一升瓶をビール瓶に換え、秀光のグラスに傾けた。

「雅之さんや貢君は龍ちゃんに殆ど面識は無かつたので、自分が子供の頃、龍ちゃんに高崎川で魚釣りや泳ぎを教わつた事を二人に話していた所だ」「そう言えばそんな事もあつたな。秀ちゃんが溺れたのを、兄貴が必死に助け上げた。また香取神社での秋祭りの獅子舞を見て、秀ちゃんは怖がつていたな。帰りの畦道で、二人は四人組に囲まれ、小遣いを巻き上げられていた時に、自分を連れていた兄貴が通り掛かり、彼らをどやしつけて、ぶん殴ってくれたつけ」腕力は人一倍強かつたもんな「兄貴は相撲大会では何時も五人抜き賞品

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。